研究ノート

近代産業都市イブレア（イタリア）の保存に関する課題

The Subjects on Conservation Coined by Modern Industrial City of Ivrea, Italy

北 尾 靖 雅*

1．研究の目的と背景

イタリアのイブレア市（人口2.4万人）では近代建築群を産業遺産として世界文化遺産に登録する活動が展開してきている。イブレアは古代ローマ時代に起源をもつ都市で、中世以来の旧市街地と20世紀以降の産業革命の過程で農村地帯から工業地帯へと土地利用の変化を伴い、近代産業都市が形成されてきた。

この都市では工場、集合住宅、個人住宅、社会・コミュニティ施設、福祉施設などから構成される都市環境が半世紀をかけて形成されてきた。イブレアでは20世紀初頭から操業を開始した事務機と小型コンピューターの生産を世界的に展開してきたオリベッティ社が地域産業の担い手であったが1990年代中期に操業を止めた。しかしオリベッティ社が建設してきた産業施設や生活関連施設はその後も地域の人々に使い続けられているなか、典型的な近代産業都市としての価値が見直され、諸施設の動態保存を伴った産業文化遺産都市を形成することを目指す、まちづくりが展開してきている。

なかでもイブレアの近代産業遺産からイタリアの近代産業、デザイン運動、社会運動、地域開発、近代生活文化の発展など多面的にイタリアの近代化を把握できるように、イブレア市は近代産業施設が多く遺る地域をオープン・エアー・ミュージアム（屋外建築博物館）として地区を選定し開放した。さらにイブレア市は近代建築群の保存と修復のためデザイン・ガイドラインを定め、ガイドラインを適正に運用するための専門の建築家（コンサルタント建築家）を選任し、文化遺産として近代産業施設の保存や修復をおこなってきている。こうした地域のもつ文化資産を世界的水準で保護・活用するためにイブレア市や地域の専門家たちは近代産業遺産を世界文化遺産として認定するための調査研究活動を展開した結果、2012年にはイタリアの暫定リストに掲載された。グローバル展開した地域の産業遺産を軸にした、まちづくりを展開してきているといえる。

そこで、イブレアの近代建築物の保護と活用に重要な役割を担ってきたイブレア市のコンサルタント建築家のエンリコ・ジョッペリーニ教授（トリノ工科大学特任教授、イブレア市近代遺産建築総監、建築家）と、世界遺産指定にむけて研究活動を行ってきたパトリシア・ボニファジオ専任研究員から、イブレアの歴史や保存にむけた取り組みに関する学術情報を得た。

エンリコ・ジョッペリーニ教授はイブレア市の近代建築群の保存と修復のコンサルタント建築家で、2008年にオリベッティの工場の再生事業でイタリア建築賞を受賞。また Open Air Museum の開設者でもある。デザインコードの作成やその運用などを地域コミュニティ活動として展開し、イブレアの近代産業遺産の保存活用に大きな役割を担っている。パトリシア・ボニファジオ専門研究員は、ミラノ工科大学の研究員として、オリベッティアーカイブの専任研究員として、イブレアの歴史研究に従事してきた。その経験から現在はイブレアの世界遺産指定に向けた研究活動を展開し、ユネスコとの間で世界文化遺産の登録に関わる実務を担っている。

イブレアにおける近代産業都市の保存に関する取り組みの実態や、世界文化遺産として登録してゆく過程に生じた諸課題をどのような問題に直面

* 本学准教授

してきたのか、など、文化遺産の登録だけでなく、街づくりとしての課題などに関しても意見交換を行い、最新の近代産業都市の正買う環境の保全にむけた手法や理論に関する知見を得てきた。特にイブレアでは、近代産業都市を動態保存するという新しい課題に向き合っていることを把握することができた、近代産業遺産を活用するまちづくりを展開してゆくための知見も含まれている。今後の研究は、広義には歴史地区として近代の建築遺産を含めた歴史的地区の真正性を担保したデザイン指針を議論し、今後の文化財行政と都市計画行政の両面にわたり、地域の生活環境を整備するための知見を得てゆくことである。

イブレアの世界遺産の登録に向けた取り組みの経験は、衰退してきた近代産業都市を地域の視点から活性化する一環として、近代産業遺産を未来に向けて文化財としての価値を損じることなく保存してゆく一連の事業と理解できる。従来の文化遺産を保護する方法でもなく、同時に現代の都市計画でもない。これまでに人類が直面していない（しかし人類が近い将来に直面する）「近代」という現代につながる時代の地域の人々の生活や産業の痕跡を地域のかけがえのない遺産として継承してゆく挑戦と理解できよう。この挑戦は世界の諸地域、あるいは日本の多くの近代産業都市が直面している、現代の都市環境の状況に対応した地域の未来を切り開いてゆく方法や道筋を検討するために大いに参考となる挑戦といえる。世界遺産の登録に対して、ボローニャ大学教授のマリステッラ・カッシアート教授は、昨年（2011年）のUIA東京大会で日本建築士会連合会の主催した国際シンポジウムで基調講演を行い、イタリアの戦後復興期の建築や都市計画を現代の視点からイブレアを考察しており、その際に北尾と研究を展開してきた。カッシアート教授とジョッペリーニ教授とイブレアの現代的意味に関して議論した結果、イブレアの問題は、世界のあらゆる都市や都市の郊外地という身近な生活環境がおかれている状況を人々が意識的に理解することを促し、世界に共通する工業化時代の遺産と未来の都市計画や地域計画との結びつきを検討するための教科書として、重要な役割を担うと調査結果を結論づけた。

2．イブレアの都市環境

2012年9月5日から9日にかけてイブレアの現地調査を行った。ジャコペリー教授と建築の修復と都市計画に関して議論をするために、オリベッティアーカイブ、屋外建築博物館、工場施設、居住施設、社会福祉施設などの建築物の調査を行った。下記写真は調査で撮影したものである。

屋外博物館（Maam）に掲示対象となっている建築プロジェクトのリストを調べたところ、建築物の用途は産業施設、居住施設、社会サービス施設の3種に分けられている。次に地区ごとにそれぞれの建築プロジェクトの件数を調べたところ、展示対象となっている建築プロジェクトの総計は49件で、居住施設が最も多く33事業、産業施設が10

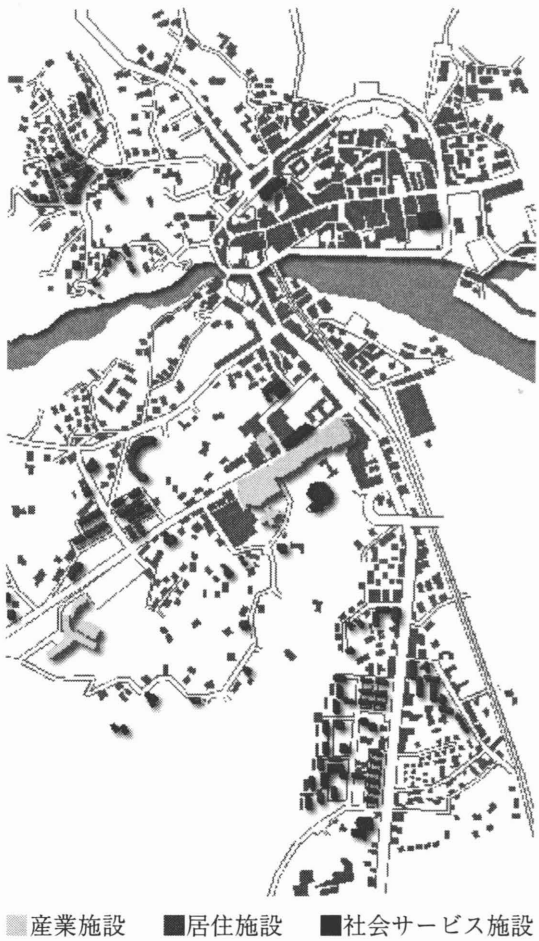

図1　近代産業遺産の残存状況
出典：屋外博物館資料

事業、社会サービス施設が6事業挙げられている。

展示対象建築プロジェクトの数が多いのがVia Jervis地区である。この地区には1940年代から1970年代に至る過程で建設された諸施設が並存していることがわかる。産業施設と居住施設に関しては1940年代、50年代、60年代に建設された建築物が展示対象となっており異なる時代の建築物群を保存の対象としているといえる。

1950年代の建設事業の展示対象件数は21事業を数えることができ、展示対象施設全体の半分が1950年代の建設事業によるものである。そのなかで居住施設の件数は17事業を占める。これらのことから、1950年代の建築事業による建造物群が屋外博物館の主題となっていることがわかる。

3．イブレアのまちづくりを研究する意義

イブレアのまちづくり研究をする意義を日本の地方都市の状況を考慮すれば以下のように位置づけられる。日本は戦後、造船業、自動車工業、電子・電気工業などの分野において世界の近代産業を主導してきた。日本には数多くの近代産業都市が存在する。こうした都市は戦後に急速に拡大したが、その原点は明治以降の産業の近代化に見いだすことができるように、日本の工業の近代化はイギリス、フランス、ドイツ、アメリカなどを追随するものであった。このことはイタリアでも同様である。

イタリアの産業革命はイタリアの統一後であり、日本の明治維新と同様に小国家が統合されたこと

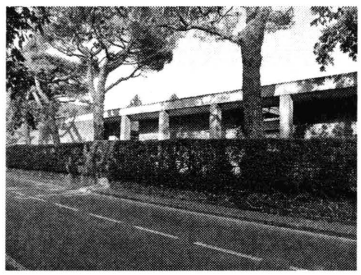

写真1　保育所（1930年代）

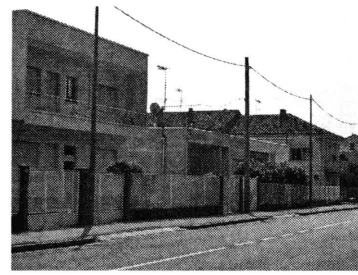

写真2　近代住宅と農村住宅

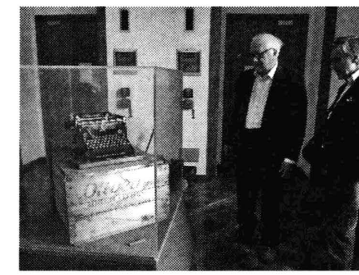

写真3　オリベッティアーカイブの代表とジャコペリー教授

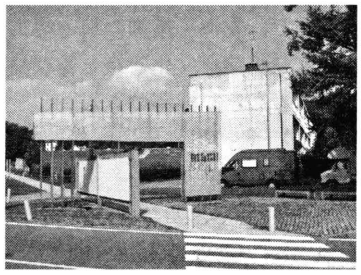

写真4　屋外博物館の展示

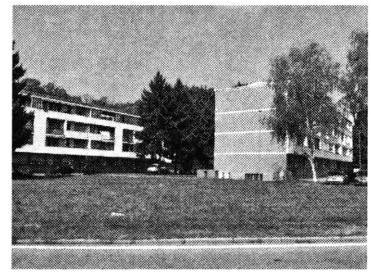

写真5　修復前の集合住宅

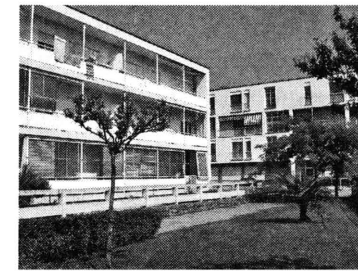

写真6　修復後の集合住宅

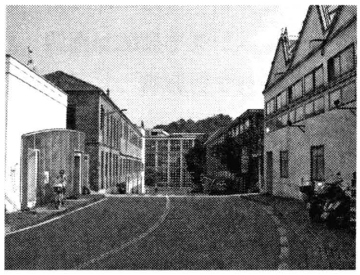

写真7　工場地区の街路景観

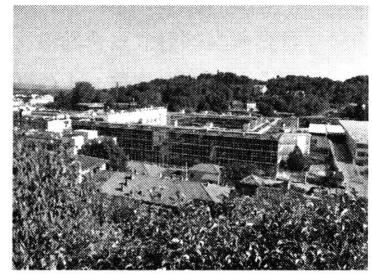

写真8　修復後の工場施設

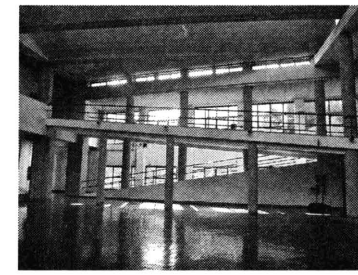

写真9　修復された工場内部

や、その時期が日本の近代化の時期とも重なる。また第二次世界大戦後の社会復興を成し遂げるために、戦前の近代工業を発展させた点も日本の戦後復興期と類似する。イブレアのオリベッティ社の工場は農地だった旧市街地の郊外地を半世紀の時間をかけて農地から徐々に工場地帯と転換していった経緯がある。農村地帯の工業化は世界のあらゆる地域で見られる土地利用変換の姿であるので、都市形成は日本の近代都市の形成と類似しており、同時にこの経緯は世界の多くの地域計画の前提条件として見いだすことができる。この点からもイブレアの近代産業都市を世界遺産とする価値があると考えることができる。イブレアノ挑戦は農地を工業用途に変換した地域の生活環境を整備するパイロット事業とも理解できる。

イブレアと日本の地方都市の工業化の類似性は、国民国家の成立後に地域産業を担ったオリベッティ社が20世紀初頭に操業を始めたことにもみられる。富岡製糸工場は日本の産業革命期に中山間地域に導入された近代工場の一例であり、イブレアの操業の時期や社会背景は日本各地の地域で工業化が進んでゆく時期に一致する。

イブレアの事務機器工業の特質はイタリア西北部の農業を主な産業とし経済的にも地理的にも不利な条件下にあったにも関わらず、小都市イブレアを含むカナベース地域の育成を担い、事務機器の分野で世界をリードする企業として地域ブランドを創出していった。企業は生産を拡大してゆくなか、地域の生活環境の整備を進めイタリアの近代文化の育成にも大きな役割を担っていった。特に1950年代から1980年代にかけて、近代工業製品をデザインの分野から製品価値を高めるデザイン戦略を展開すると同時に、地域計画、建築デザイン、労働環境の整備、企業経営（マネージメント）などの分野を一体的に整備する先進的な取り組みをコミュニティ・ムーブメントとして位置づけ、地域社会の自立と地域産業の発展・育成を目指す企業活動を展開し、生産品の付加価値を高めていった。さらに電子工業分野においても先進的な小型コンピューターの開発などユーザーの立場から産業製品の開発と製造を展開していった。日本においても、地方都市に拠点のある近代工業が世界水準の工業製品を生産するに至ったことや、地域社会の形成に大きく役割を担ってきた点なども類似する。ところが1980年代以降、情報技術革命がアメリカで急速に展開し、1990年代半ばにオリベッティ社は操業を止め約100年の世界に広がった地域産業の歴史を閉じた。そして、小都市イブレアを拠点として半世紀にわたり近代産業都市の形成を続けてきた近代産業都市が遺った。日本では工場の海外移転が進み地域の基幹産業が衰退する状況もみられる。このように、イブレアと日本の地方都市の状況に構造的な類似点を多く見いだすことができるので、先進工業国の地方都市の今後の地域政策や産業政策を文化遺産と結びつけてゆく議論を展開することが期待できる。